

8回 生命倫理に関わる問題(1) / 医療・養護施設殺人事件と倫理問題

社会的弱者を殺害した事件を紹介

大口病院連続殺人事件

中村ゆきつぐ(元自衛隊医官) ブログ 参考

2016年9月、点滴に界面活性剤が混入されて多数の患者が亡くなった事件。(点滴に異物、患者中毒死 同階で男女3人死亡) 病院職員の関与も噂されています。(病院職員の関与も「否定できない」)

病院の管理の観点で報道されていますが、病院という場所で行われた殺人事件です。

医療という行為。手術でもそうですが基本、体に傷を付ける行為です。それはあくまでも治療という原則に基づき、法律で正当化されています。つまり、一歩間違えば傷害罪、殺人罪と紙一重の行為なのです。厳密にコントロールされ、ルールが決められ、医療という行為、つまり人間を助けようという共通の目的のために行なわれているから許されているものです。いわゆる倫理の世界です。

この病院、いわゆる終末期の患者が扱われていました。そこにはDNR (do not resuscitation) を採用しており、積極的な医療行為は存在していません。そこに悪意のある人間、殺人を厭わない人間が現場に入ってきたら正直医療の安全の崩壊、つまり一種の殺人を止めることはできません。この終末期病院の特殊性はこの殺人のハードルを下げてしまった可能性があります。いわゆる倫理の崩壊です。

どうしてもマスコミの論調を聞いていると、点滴管理(鍵で保管されていない)の不備だとかが報道されていますが、病院の管理の問題ではありません。実際麻薬とかは管理していますが、普通の点滴を鍵付きで管理するなんてコストがかかって仕方ない。医療費あげていいならやりますけど。

唯一病院側の問題を挙げるとすると、看護師への傷害事件が起きた時の対応でしょう。ある介護士がツイッターで報告(点滴異物混入殺人事件にかかる内部告発)しているけど、この病院の職場のメンタルヘルスコントロールは問題だった可能性は挙げられます。彼の別のツイートにある発達障害の問題などが絡んでいるのかな。ただ病院を困らせたいと思う無差別殺人。終末期の患者をないがしろにする勝手な考えを持つこの犯人、いい加減にそちらを責めて、病院を責めるのはその後。マスコミさんへお願いします。

産経ニュース 参考

大口病院事件をめぐる市の対応を検証する第三者委員会は2017年3月30日、情報提供への対処の遅れを「消極的で不適切だった」とする最終報告書をまとめ市に提出した。

報告書を受け取った市の鯉淵信也健康福祉局長は市の対応について「大いに反省しなければならない」と述べた。報告書では、事件前に看護師のエプロンが切り裂かれるなどの情報が市に複数寄せられながら、市側が消極的な対応を取った点を指摘。改善策として情報の信憑(しんぴょう)性の確認方法の明確化、警察などとの連携強化を挙げた。

逮捕されたのは捜査線上に名前が挙がっていた元看護師だった。「20人くらいの患者にやった」。驚きの供述を始めている。

* * *

朝、自宅近くのバス停から7時18分発のバスに乗り、最寄りのターミナル駅へ。そこからまたバスを乗り継ぎ、川崎市内の物流倉庫に向かう規則正しい毎日。人の噂も七十五日と言うが、すっかり日常を取り戻したと思っていたのだろうか。

横浜市神奈川区の大口病院で2016年9月に入院患者が相次いで中毒死した事件で、捜査開始から約1年10カ月、同病院の当時の看護師、久保木愛弓容疑者(31)が殺人容疑で逮捕された。逮捕前の久保木容疑者の様子を知る人物は話す。

「(看護師を辞めた後に勤めていた)物流倉庫では派遣社員として、今年の春から働いていました。寄り道もせずに帰り、休日もほぼ出歩くことはなかった」

●同じ場所に住み続ける

久保木容疑者が住んでいた横浜市鶴見区内のアパートの近所に暮らす住人は、驚きを隠さない。「事件発生時に久保木容疑者が犯人に疑われ、彼女の家には報道陣が押しかけていました。でも、その後も同じ場所に住み続けていたので、てっきり犯人ではないのだと思っていました」

久保木容疑者の逮捕容疑は2016年9月18日に西川惣蔵さん(当時88)の体内に消毒液「ジアミトール」を混入させ、それに含まれる界面活性剤による中毒で殺害したものだ。西川さんの死亡の2日後には、同室に入院していた八巻信雄さん(当時88)も死亡。血液と点滴から同じ界面活性剤の成分が検出されており、点滴に消毒液を混入したとみられる。被害者は2人に留まりそうにない。

「事件の2カ月前の7月中旬ごろから、20人くらいの患者に(点滴への消毒液の混入を)やった」

捜査関係者によれば、久保木容疑者はそんな供述をしているという。犯行動機に関しては「自分が勤務のときに亡くなると、家族への説明が面倒だった」とし、「自分の勤務中に亡くなるかもしれない容体の悪そうな患者を選んで、消毒液を混入した」などと話している。

●上司にもストレス

久保木容疑者が勤務していたのは大口病院4階にある療養病棟だった。自分で食事できず、回復の見込みが低い終末期の患者などを専門的に診ていた。大口病院の近所に住む70代の男性はこんな話をした。「病院の前を霊柩車通りと揶揄する人がいるくらい、亡くなる人が多い。大口病院は料金も良心的で、

ほかで見放されても診てくれると評判だった」

終末期医療の現場も知る精神科医の片田珠美さんはこう話す。

「終末期医療は死亡退院が圧倒的に多くて、医師も看護師もやりがいを感じる事が難しく、職場にストレスを生み出しやすい。患者が終末期の高齢者であることから、久保木容疑者は罪の意識や後悔をあまり感じずに済んだのかもしれない」

久保木容疑者の職場ではトラブルが続いていた。16年4月にはナースステーションにあった看護師の服が切り裂かれ、6月にはカルテ数枚が紛失。8月には看護師のペットボトル飲料に異物が混入され、職員が口に含むと漂白剤のような異臭がする騒ぎもあった。

久保木容疑者の母親に近い人物は、こう話す。

「現場の上司にもストレスを感じており、病院の中で犯人捜しが始まったときには母親に『疑われるのが嫌だし警察を呼べばいい』などと話していた」ただ、身の潔白を母親に告げる半面、供述によればこの時期から点滴への無差別な混入が始まっている。いったい、何が狂気につながったのか。

久保木容疑者は4人家族の長女。会社員の父と専業主婦の母に育てられた。神奈川県伊勢原市の中学時代の同級生は「目立たない大人しいタイプ」と振り返った。公立高校を卒業後は看護学校に進学し、2008年に看護師免許を取得。別の病院勤務を経て15年5月に大口病院に転職した。

元同僚はこう話した。

「仕事は真面目ですが、仕事以外の付き合いはなく、何を考えているかよくわからない」

(AERA編集部・澤田晃宏)

相模原障害者施設殺傷事件

Wikipedia 参考

2016年7月26日未明、神奈川県相模原市緑区にある神奈川県立の知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」で発生した、刃物による大量殺人事件。同日中に19人の死亡が確認され、26人が重軽傷を負った。第二次世界大戦後の日本で発生した殺人事件としては犠牲者の数が最も多く、戦後最悪の大量殺人事件として社会に衝撃を与えた。

犯行前の行動

2016年2月14日に衆議院議長公邸を訪れ、衆議院議長の大島理森（ただもり）に宛てた手紙を職員に手渡していた。この手紙の一部には、犯行予告とも取れる文言があり、同施設を含む2つの施設が標的として名指しされるとともに手口が具体的に記されていた。供述によれば、2月に安倍晋三首相宛の手紙を自由民主党本部にも持参している。

また、2月17日に「聴いて下さい！！話は障害者の命のあり方です」から始まるメッセージをLINEで同級生らに一斉に送信し「彼らを生かすために莫大な費用がかかっています」などと自説を展開した。その後犯人は同級生らに直接電話を掛けて犯行計画を打ち明け「俺だって殺したくないけど、誰かがやらないといけない」「職員を縛るから見張ってくれ」などと犯行に協力するよう勧誘した。一部同級生は「ふざけるな」と言って中止を迫ったが、聞く耳を持たなかった。

精神鑑定医の情報

「自己愛性パーソナリティ障害」は、衝動の抑制が効かなくなり、理性的な判断が難しくなる場合はあるものの、刑事責任能力を左右する精神病とは区別されるという。精神病というよりは「性格の大きな歪み」に分類され、自分の意見が通らないと「周囲がいけない」「法律がおかしい」と自己中心的な思考に陥りがちになる。その上で、犯人の「かなり冷静に一貫した行動や言動」や、事件後の逃走を「自分の行動が犯罪だと認識している」点を指摘し、犯人の日常生活には問題がなく「自己責任能力はあり、起訴はまっとうな判断である」と評した。

被害者について

死亡したのは、いずれも同施設の入所者の男性9人（当時41～67歳）、女性10人（同19～70歳）である。死因は19歳女性が腹部を刺され、脾動脈損傷による腹腔内出血、40歳女性が背中から両肺を刺されて血気胸、残り17人が失血死とされ、遺体の多くは居室のベッド上で見つかったことから、犯人が寝ていた入所者の上半身を次々と刺したとみられる。また、負傷したのは施設職員男女各1人を含む男性21人、女性5人で、うち13人は重傷を負った。入所者24人の負傷内容は全治約9日～約6か月間の胸への切り傷などとされる。被害者の名前について神奈川県警は「施設にはさまざまな障害を抱えた方が入所しており、被害者の家族が公表しないでほしいとの思いを持っている」として、公表しない方針。被害者の家族は公表しない理由を、「日本では、全ての命はその存在だけで価値があるという考え方が当たり前ではなく、優生思想が根強い」と説明した。

神奈川県知事は「裁判を通じて、この事件の全容が明らかになることを望む」と表明、また相模原市長も「原因が究明され偏見や差別のない共生社会の実現につながってほしい」とコメントを出した。

川崎老人ホーム連続殺人事件

2014年11月から12月にかけて川崎市のサービス付き高齢者向け住宅「Sアミーユ川崎幸町」にて相次いで入居者3人が転落死し、初動捜査では変死として処理されたものの殺人事件の可能性が疑われていた。

2016年2月16日、神奈川県警は第一発見者であり、この件に関わった元職員の男（当時23歳）を殺人容疑で逮捕した。元職員は2015年5月に同老人ホームで繰り返し窃盗を行った容疑で逮捕され、懲役2年6カ月執行猶予4年の判決を受けていた。

2014年11月3～4日に男性（当時87）を、同年12月9日に女性（当時86）をそれぞれ4階のベランダから転落させ殺害した。ついで、同年12月31日午前1時10分ごろ、女性（当時96）の体を抱えて6階のベランダから落とし、殺害した。

元職員は動機について「様々な感情があった」と述べ、転落死した当時87歳の入居者について「手がかかる人だった」と述べた。また、「介護の仕事にストレスがたまっていた」という趣旨の供述もしたことから、警察は介護のストレスから犯行に及んだとみている。この逮捕された元職員について、知人は「優しいやつ」と語る一方、「虚勢を張る面もあった」と語った。

施設が事件を防げなかっただけでなく、警察の捜査にも課題が残った。3件の現場には別の検視官が入り、介護を受けているお年寄りが手すりを越えて転落死していることに疑問を持たなかった。

殺人を担当する捜査1課が連続不審死を把握したのは、今井容疑者が施設内の窃盗事件で逮捕された昨年5月以降だった。同課は「情報共有が十分でなかった」として、同じ場所で続けば把握できるシステムを整えた。

ある高崎市内の有料老人ホームにおける認知症高齢者介護の記録を紹介

認知症高齢者Aさん（女性93歳）の記録（業務日誌）を紹介

- 3月 1日 食後の投薬で、薬袋を食べていたので、やさしく取り上げたら暴力を振るわれた。
- 3月 2日 深夜の見回りで、食堂のゴミ箱でリンゴの皮を食べているところを発見。
- 3月 3日 ひな祭りのお食事会で突然車いすから立ち上がって放尿。
- 3月 4日 ぬり絵をしているとき、水色のクレヨンを食べ始める。
- 3月 4日 食べているクレヨンを取り出したら、口から他の色が出てきた。
- 3月 5日 深夜の巡回で、トイレに座って便を食べているところに遭遇
- 3月 6日 食堂で突然放尿したため、職員が叱ってしまった。
- 3月 7日 会話をしていると、口から便の匂いがした。
- 3月 8日 便を自室のチェストに集めている事を見発見。
- 3月 9日 隣に座った男性老人に罵られ、口論となったために職員が仲裁に入る。

ほぼ毎日、何らかの問題行動をしているAさんに対し、職員は疲弊してきている。

医療・福祉施設での殺人事件に対するネットでのコメント

M

障害者施設だけでなく高齢者介護でも容疑者と同じようなことを思っている人は少なくないと思います。ただ自分が殺人犯になるのが嫌だからやらないだけです。私の主張は、別に障害があろうと高齢者だろうと生きる権利はあるのです。ただ彼らは周囲のサポートのおかげで生活ができているという感謝がほとんどないのです。権利主張ばかりしており、健常者に対しての配慮がほとんどありません。

何かあれば障害者差別だ、障害者にも普通に生きる権利だと騒ぎ立てるのです。健常者だってワーキングプアで生きていくのに大変なのです。こんな人が障害者を優遇しろという発言をどう思うでしょう。障害者なんか社会のゴミだという結論に達するでしょう。

元介護業界人

Twitter では「よくやった」などと信じがたいつぶやきが続出し、「容疑者はぶっちゃけ障害者という税金食いのやつらを殺処分した英雄」との発言がみられました。

施設の職員は、ある程度割り切ってバランス感覚を保っていないと暗黒面に堕ちてしまいます。おそらく今回の犯人は、過度に感情移入してしまったのだらうと思います。きっと彼は真面目すぎたのかもしれない。かといって殺人を犯したことは擁護しません。

何が彼を狂わせたのか本当の闇は分かりません。しかし、今回の事件で福祉業界自体、職員の処遇、利用者の人権を含めたきちんとした倫理綱領を作らなければいけないと思います。「やさしさ」「よりそい」だけでは物事が何も解決しないことに、施設経営者や国は気が付くべきです。

サードウェーブ系哲学的ゾンビ

相模原障害者施設殺人事件の犯人は、「人間を「尊厳」においてではなく、「価値」の優劣において理解する思想」という点で、優生学と同じ考えです。犯人の「障害者」観は、その犯人の主観にすぎません。犯人はその主観を「真実」と錯覚し、彼は障害者を殺しました。

素朴な価値観、例えば「強い人間が良い人間」「役に立つ人間が良い人間」といった考え方は非常に分かりやすいです。何も考えず、苦勞もしてこなかった人にとっては、むしろ「普通の方考え方」かもしれません。「普通の人」ならうっかり受け入れてしまいがちな考え方でしょう。しかし、物事は広く長い目で見る必要があります。

もしあなたが、突然事故に遭ったり病気に遭ったりしたら？ その結果、重度の障害を負うことになったら、あなたは何を望みますか。幸せに暮らすには、どうしますか。

明日、あなたも障害者になるかもしれないし、一文無しになるかもしれない。だから、「明日の自分」のために、全ての人に基本的人権を認めるべきなのです。たとえ、その人が「生きる意味のない人間」や「役に立たない人間」であってもです。

幸せは主観的なもの。他人が決めたり、比べるものではないのです。

人間らしさは、非効率性や非合理性に宿ります。人間という目的のために、社会は手段であるべきと考えます。社会という目的のために、人間を手段（殺人）にしてはいけないのです